

4月の配架図書（その4）

■ 老後難民 50代夫婦の生き残り術

野尻哲史/著

出版社：講談社+α 新書

「老後難民時代」は暗いのか、というと、そうとも限りません。誰もが必要になる高齢者サービスの値段が高くなり、苦しい生活を強いられることとなります。そのサービスを受けるにはきっと想像以上の資金が必要になるでしょう。資産運用でも、遺産相続でも、そして地方移住でも、この際なんでも検討しておくべきです。



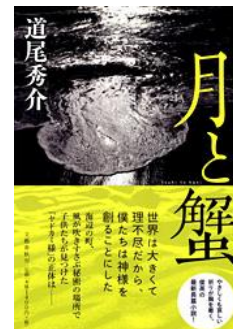
■ 月と蟹

道尾秀介/著

出版社：文藝春秋

小学生の慎一と春也は「ヤドカミ様」なる願い事遊びを考え出す。100円欲しい、いじめっ子をこらしめる——他愛ない儀式はいつしかより切実な願いへと変わり、子供たちのやり場のない「祈り」が周囲の大人に、そして彼ら自身に暗い刃を向ける…

…。注目度ナンバー1の著者による最新長篇小説。鎌倉の風や潮のにおいまで感じさせる瑞々しい筆致で描かれる、少年たちのひと夏が切なく胸に迫ります。



■ きことわ

朝吹真理子/著

出版社：新潮社

葉山の高台にある別荘で、幼い日をと共に過ごした貴子と永遠子。ある夏、とつぜん断ち切られた親密な時間が、25年後、別荘の解体を前にしてふたたび流れはじめる。ふいにあらわれては消えてゆく、幼年時代の記憶のディテール。やわらかく力づよい文体で、積み重なる時間の層を描きだす、読むことの快樂にみちた愛すべき小説。



■ 苦役列車

西村賢太/著

出版社：新潮社

友もなく、女もなく、一杯のコップ酒を心の慰めに、その日暮らしの港湾労働で生計を立てている十九歳の貫多。或る日彼の生活に変化が訪れたが……。こんな生活とも云えぬような生活は、一体いつまで続くのであろうか——。青春に渦巻く孤独と窮乏、労働と痛飲、そして怨嗟と因業を渾身の筆で描き尽くす、平成の私小説家の新境地。

